



富嶽三十六景



北斎が描いた富嶽三十六景の遠江(とぎやま)

鉄のふしぎ? 博物館

■20

北斎の見た大鋸(おが)

画像はカラーと交換しています。

衣川製鎖工業・衣川良介社長

富嶽三十六景(部分目立て)



山中の絵には家族で生活を
をする杵人(そまびと)
が描かれています。お母
さんが小さな子どもをお
んぶして、大鋸の目立て
を見えています。富士山を
借景に大きな木材が画面
を斜めに横切る大胆な構
図は私の好きな絵の一つ
です。祖父が木に埋め込
んで目立てをしている前
挽大鋸はこの家族の重要
な生きる糧で、力のある
若い息子や男達の働きを
脇で支える老人の姿で

す。この前挽大鋸は『和
漢三才図会』に描かれて
いるものと同じ長方形を
して、持ち手(首)の部
分は鋸歯と直角について
います。北斎が見た前挽
大鋸、歯の部分は『玉鋼』
で出来ていたに違いあり
ません。当時、刃物は焼き
入れの出来る炭素量の多
い『玉鋼』で作られ、ク
ギなどの柔らかい金物は
『包丁鉄』割鉄』から、
鍋や釜は『スク鉄』(鋳物
で)作られていました。



拳大の玉鋼(鉄の
ふしぎ博物館所蔵)

私は初めて『玉鋼』を
見たとき、「え！これ
が！」大きな驚きを感じ
ました。鉄は緻密な鉄板
や丸棒や角材と思ってい
た私には、大阪名物『岩
おこし』よりのもっと粒
が大きく隙間だらけの塊
で、鉄とは思えなかった

た人もいるが、大勢は大
正初期に決まっていた。
玉鋼は材料として技術的
にむずかしいばかりでな
く、製品に良否の差がは
なほ大きい。亡父の師、
作次郎は上手だったが、
それでも一年間には疵物
が床下に山のようになっ
た、と言う。需要がまし
ます増えて、その上精巧
な薄い鋸を要求される
と、どうしても、玉鋼よ
り原材料として精錬され
た物を欲求する。それに
玉鋼の鋸は高価だった。
作次郎作の尺両歯鋸は当
時の大工賃銀の一週間分
に相当したと言う。鋸の
値段の引き下げも、需要
者の熱望するところだっ
た。明治末期に角鋼が現
われた。8分〜1寸など
の角棒だ。輸入鋼で英国
かスウェーデンあたりの
製品と思うが不詳であ
る。これを伸ばして鋸を

作った。良質精緻な鋼で、
昭和中期頃老木工が自慢
の種にした、青黒の漆の
ような艶で平らに仕上が
っている鋸は、ほとんど
角打ちだった。現在(1
975年)は角鋼打ちの
鋸もほとんど見かけな
い。製造期間が短く、そ
うえ、切れ味も良いか
ら消耗されてしまったの
だ。玉鋼の鋸は非常にす
くないが、すこしはみか
ける。玉鋼打鋸は青黒色
の艶はでない。昭和初頭
頃は相当あったが、その
記憶をたどっても大半は
茶褐色の艶だ。ごく末期
のものには黒い艶のもの
もある。以下略(P19
6より)

▽参考図書『和漢三
才図会』東京美術 19
79年、『鋸』吉川金次
法政大学出版局 200
1年